

研究会概要

Overview

高田 洋

本研究会は、社会情報学会北海道支部と札幌学院大学社会情報学部との共催である。今回は、千葉正喜会員が札幌学院大学を定年退職されることを受け、長年の教育・研究活動の集大成としての「社会情報学」とは何かという根源的な問題についての報告を中心とし、「社会情報学教育と社会情報学の未来」をメインテーマとした。札幌学院大学社会情報学部は、最初の「社会情報学部」であり、その20年の歩みは「社会情報学」の学としての成り立ちの歴史でもあった。その当事者からの報告を中心に「社会情報学」の今後の展開を議論した。第一報告の大國会員からは、社会調査データアーカイブ SORD の現状とその社会情報学としての視点が報告された。SORD (Social and Opinion Research Database Project) は社会情報学部の創立と共に誕生したプロジェクトであり、その意図は「社会情報学」の「共通のプラットフォーム」の「母胎」化にあった。資料・データという情報がどのように社会的に集められ、蓄積され、展開され、社会情報学をどのように生み出していくのかの戦略の中に SORD が母胎として位置づけられることを指摘した。

実際のデータアーカイブの事例と共に報告が行なわれた。

第二報告の千葉会員は、「社会情報学の教育実践と学としての評価体系の形成」としての教育と研究の交互関係を通じた到達点が報告された。社会情報学の教育目標として「社会的関係性において、情報の意味や価値が理解でき、社会に対して的確に情報を発信できる知識と技術を体系的に身につけること」を掲げ、一方で、「情報は対象の価値認識をコード化したものであり、その発信（デコード）と受信（エンコード）の最終端（両端）が人であるのが社会情報学である」と学としての定義が行なわれた。現代の情報社会において情報の意味や価値が理解できるためには、「人」が介在するからこそ、発信と受信のシェイクハンドプロセスの必要性が指摘された。

コメンテーターの伊藤会員からは、社会情報学の重要性と発展の必要性が高まっている現在、どのように社会情報学の道筋を描いていくべきなのかということが論じられた。田中一先生の参加もあり、社会情報学の始まりから現在までを俯瞰した上での今後の課題について有意義な議論が行なわれた。